福島県立医科大学学術成果リポジトリ
FUKUSHIMA MEDICAL UNIVERSITY

モンゴルでのアクションリサーチに参加して：海外視察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 福島県立医科大学看護学部 公開日: 2019-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀内, 輝子 メールアドレス: 所属:
URL	https://fmu.repo.nii.ac.jp/records/2000613

海　外　視　察

モンゴルでのアクションリサーチに参加して

基礎看護学部門　堀内　輝子

2018年６月27日～７月２日に本学医科学研究科共同大学院の山田教授の「モンゴルのウラン鉱床近郊の住民主体被ばく対策―有効な支援手法と強化要因の検証―」の分担研究者として，モンゴル国ゴルノゴビ県サインシャインド村のワーキングに参加する機会を得たので紹介する．

本研究は，「モンゴルの対象村の被ばくと住民の健康状態の実態を調べ，その結果をもとにその村の住民が「被ばく対策を通じて健康を守る」活動を協議し，決定し，実行・継続してゆくまで支援することである．その過程で社会文化的影響要因等も考慮し，いくつかの活動支援･強化手法を提供し，それぞれの有効性を検証する」ことを目的としている．これまで，３回のワーキングが実施されている．これまでのワーキングの主な内容として，住民の健康状態の把握のための健康診断，空間放射線量の測定，ファシリテーターとなる住民への教育を行ってきた．また，モンゴルの分担研究者，ファシリテーターの中核を担う現地の病院長，県環境局の職員を福島医大に招き，原発事故に関連する研修を実施してきた．

私が今回のワーキングで実施した内容は，現地のファシリテーター達を対象に，彼らが災害に関連するリスクを認識し，地域のリスクコミュニケーターとして求められる内容は何かについてである．クライシスの状況では，当事者がリスクをどのように受け止めているのかによりコミュニケーションの方法は異なることや，ステークスホルダーとして顔の見える関係性の重要さについて述べた．

レクチャーの間，参加しているファシリテーター達

写真１　プレゼンテーション

写真２　住民の参加者と

モンゴル語によるプレゼンテーションの内容

は，これまでに学んだ内容をお互いに確認している様子が見られた．この状況から，ステークスホルダーの関係が醸成されていることが伺えた．

モンゴルでは自然災害が殆ど発生しない状況のため，日本の自然災害に備えるという文化について理解することは難しいと推察された．しかしこれまでに彼らは，自分たちの身の回りのリスクについて学習していたため，日本の諺（ことわざ）である「備えあれば憂いなし」を紹介し，普段から準備することの重要性を伝えた．モンゴルでは，この諺（ことわざ）に類似する内容の言い伝えは無いのかを尋ねたが，「無い」と言う反応であった．しかし，「困った時は経験者に聞けば良い」と言うことを話しており，日本の言い伝えである「てんでんこ」に相当する内容であると感じた．そこで，リスクに備えるためには，確かな知識が必要であり，災害が発生した時には正しい情報を，自分が担当している住民にリスクコミュニケーターとして伝える役割があることを，ファシリテーター同士共有することができた．

今回ワーキングに参加し感じたことは，住民同士のお互いへの関心の高さと，ファシリテーター達をマネジメントしている病院長との信頼関係の強さである．この関係性は，自分たちで考え意思決定が求められる状況において，強力なレジリエンスとなると実感した．また，異文化であるモンゴルの状況にあわせ，日本の知見を活用できるように住民と共に考えていくことの重要性について学ぶ機会となった．

最後に今回ワーキングに使用した資料の一部（モンゴル語）とワーキングの状況の写真で報告とする．